

元首相銃撃、寄る辺なき個人の「自力救済」か 宮台真

司さんに聞く 2022年7月17日 14時00分



社会学者の宮台真司さん

安倍晋三元首相が銃撃され死亡した事件は、日本社会に衝撃を与えた。社会学者の宮台真司さん（63）は、1995年に明るみに出たオウム真理教の一連の事件など、宗教と社会の問題を長年論じてきた。宮台さんは、山上徹也容疑者（41）が凶行に至った社会的土壌に目を向け、「寄る辺なき個人をいかに社会に包摂するか」を考えていくことが大切だと指摘する。

・ 連載「元首相銃撃 いま問われるもの」一覧

——なぜ事件が起きたのか。

これまでの報道によると、容疑者が安倍氏を狙った動機については、本人の供述から政治的な主張にもとづくテロではなく「個人的な恨み」との見方が強まっている。

実は、大正・昭和初期の日本で続発した政治家らの要人暗殺にも、不遇感を抱いた個人が引き起こした事件が少なくなかった。背景には都市化や経済格差などがあり、事件を起こした当事者の多くに個人的不満と統治権力に頼らない自力救済の意識はあれど、世直しのために統治権力に政策変更を迫るテロを実行するという意識は薄かった。

——容疑者が犯行に至る動機を抱くような社会的背景があるということか。

宗教法人「世界平和統一家庭連合」（旧統一教会）に入信した容疑者の母親が破産した2002年から凶行に至るまでの20年間は、多くの若者が就職氷河期の影響を受け、労働・雇用市場で非正規雇用が拡大し続けた時期に重なる。

容疑者は、資格取得などに努めながらも職を転々とし、家族関係にも恵まれないまま40代を迎えた。**人一倍、孤独や孤立**を感じていたことだろう。

容疑者のような寄る辺なき個人を一人でも多く社会に包摂し、感情的な凶行を起こしたり、過激な主張の政治・宗教団体に吸い寄せられたりしないで済む暮らしを送れるように、互いに声を掛け合う人間関係を身の回りで築く実践を粘り強く続けないと、事件はまた起こりうる。

——事件をめぐっては**政治と宗教の関係**が注目されている。

山上容疑者が銃を何丁も自製し、確実に人の命を奪おうと強い殺意を抱いたのは、安倍氏と旧統一教会の密接な関係を信じたからだろう。

今回の行為は許されないが、そう信じるに足る要素が、理不尽にも命を奪われた政治家の側に皆無だったとは言えない。安倍氏は旧統一教会の友好団体の集会にメッセージを寄せるなど、両者が密接な関係にあると受け取る人がいても不自然ではないからだ。

それどころか、独特の世界観と過度な資金集めを特徴とする宗教団体が、長い時間をかけて自民党などの政界内に浸透しているように映る。現代日本政治のタブーが図らずも浮かび上がった形だ。

——新興宗教の中でも旧統一教会は過去に多くの批判を集めてきた。

戦後韓国で生まれた旧統一教会は、日本国内でも多くの信者を獲得、主な資金源としてきた。**68年には東西冷戦下で共産主義勢力に対抗する友好団体・国際勝共連合を設立**した。80~90年代には、**人の不幸を先祖の因縁だと説明して印鑑やつぼなどを売りつける**靈感商法が批判を浴び、社会問題化した。

——なぜ多くの信者を集めることができたのか。

米国でも同時期、人工妊娠中絶や進化論を否定するキリスト教原理主義が影響力を持ち始めた。共通点は、資本主義が拡大するなかで、**「不全感を抱く分断された個人」が量産**されたことだ。

かつて就職や結婚から調味料の貸し借りまで生活の便益は、家族や地域の人間関係からなる生活世界を通じてのみ手に入った。だが、市場や行政のシステムを頼るようになった結果、面倒がなく便利になった半面、**人間関係が希薄**になった。

20世紀半ばに社会学者ラザースフェルドは、中流化による豊かな人間関係が、健全な民主主義を支えるとした。だが世紀末からのグローバル化による中流分解で、剥（む）き出しになった個人が、不安とデマに直撃され始めた。

そこにつけいる形で、独特の世界観で支持者を束ねる宗教団体が、集票力によって政治的影響力を増した。かくして内政面では「政治の原理主義化」、国際的には「原理主義のグローバル化」が起きるようになった。

——現状はどうか。

互いにバラバラで「呼んでも応えない周囲の人」と、システムが複雑化して「呼んでも応えない統治権力」は、不全感に駆られた剥き出しの個人を一定割合生む。そこに、自分と社会の現況を説明し、生きる意味を含めた「確かな物語」を与えてくれるカルトが必ず巣くう。95年のオウム真理教事件もそうだった。

私は、95年の著書で「終わりなき日常を仲間とまったり生きろ」と、身近な人間関係を支えとする処方箋（せん）を示したが、状況は変わらないどころか、その頃からの経済停滞と生活世界の空洞化で、問題は深刻化した。

——メディアや世論は事件とどう向き合えばいいのか。

既に安倍氏への過度な礼賛や批判が「確かな物語」を求めて増殖中だ。それとは別に、「民主主義への挑戦」と批判して済ませる紋切り型も気になる。無差別殺傷事件も政治家を狙った事件も、「剥き出しの個人の不安」と「国家を呼んでも応えないがゆえの自力救済」という類似面がある。

17世紀半ばに「リヴァイアサン」を書いたホッブズは「暴力か、信頼か」の択一を迫った。「自力救済の継続か、国家の適切さを信頼した経済活動か」の選択だ。これは「国が信頼できないなら自力救済」という含意を持つ。

剥き出しの個人を感情的に動員するポピュリズムが民主主義国を覆い、どこも政治が適切に機能しにくくなった。国家への不信は世界的傾向で、それが手の届く範囲で助け合う共同体自治への動きを生む一方、その動きがない場所では犯罪やカルトを含めた自力救済が増えてきた。

事件の衝撃が大きいと、心の平穏に向けた物語化が進む。それだけだと、これからも今回のような事件を防げない。慎重に取材や議論を重ねてほしい。（聞き手・大内悟史）

◇

みやだい・しんじ 1959年生まれ。東京都立大学教授。現代社会や戦後思想を広く評論。著書に「日本の難点」「社会という荒野を生きる。」など多数。